

## 漢字が言葉への理解、興味を深める

このように、幼児にとっては漢字のほうが、ひらがなよりけるかに覚えやすく、また、幼児にもわかりやすい具体的な内容をもつ漢字であれば、画数の多さや形の複雑さに関係なく、どんどん覚えていきます。

そして、もう一つ有要なことは、最初から漢字で教えることによって、幼児の言葉そのものへの理解や興味・関心も深まっていくということです。

たとえば、ひらがなで「あめ」と書いてあったとします。これだけでは「雨」なのか「飴」なのか、まったく区別が付きません。こんなとき、私たち大人なら、そのときの状況や前後の文脈などから、どちらの意味か推測することもできますが、まだ言葉の力そのものが十分でない幼児にとって、これは大きな負担です。

それに、せっかく読めても、意味がはっきりわからないのでは、子どもはちっとも楽しくありません。

ところが、これを漢字で書いてあれば、見ただけで「あ、空から降ってくる雨だな」とか「さっき、おやつに食べた飴のことだ」というように、瞬時にはっきりと言葉の意味を思い浮かべることができるのです。

また、私たちの身のまわりには「幼稚園」はあっても、ひらがなで「ようちえん」という表記は存在しません。ですから、いくらひらがなで言葉を覚えても、読めるのは、幼児や小学低学年用の教材くらいで、せっかく学んだことが少しも生かされません。

ところが、幼稚園は「幼稚園」と、そして「学校」「病院」「郵便局」「交番」など、漢字で表記することが常識となっている言葉は、何でも最初から漢字で教えてあげれば、街を歩いているお父さん、お母さんが読んでいる新聞や本をのぞいても、いくらでも自分の知っている言葉を発見することができます。

「お母さん、僕(私)、この字、読めるよ！」 この喜びこそが、漢字や言葉に対する興味と関心の原動力となり、また、本を読んできたという意欲や自ら学ぶ力にもつながっていくのです。